

未来見据え



(一社) 栃木県建設業協会
広報委員会
委員長 生駒 憲一氏



(一社) 栃木県建設業協会
広報委員会
副委員長 吉田 わたる 氏



(一社) 栃木県建設業協会
広報委員会
副委員長 荒井 かく 氏

(一社) 栃木県建設業協会・座談会

少子高齢化の進展や団塊世代の大量退職などに伴い、国内の建設業界は若い世代の担い手の確保・育成が喫緊の課題となっています。今後、2020年の東京五輪・パラリンピック、県内では2巡目の開催となる2022年の国民体育大会などを控え、さらに人材不足の増大が懸念されています。一般社

建設業界の担い手を応援

■若手の減少・構造的な課題

——建設業界は、担い手の確保と育成が課題となっています。県内も同様と思いますが、最初に委員長から業界の現状についてお聞かせください。

生駒 建設業は私たちが暮らしていく上で不可欠な道路などの社会資本整備をはじめ、豊かな暮らしを未来につなぐためのインフラの維持管理等を担い、その使命はますます増大しています。しかし、業界では技術者の高齢化や若手の減少といった構造的な問題が生じています。このような中、昨年6月に「品確法」「入契法」「建設業法」のいわゆる「担い手3法」が改正されました。工事の適正な施工と品質の確保、担い手確保が主な目的ですが、受注者としての責務を果たすことが肝要です。2022年には、県内で2度目の開催となる国体を控え、業種によっては人材不足が懸念されており「担い手3法」による経営環境の改善を期待しています。

■スケールの大きな仕事がやりがい

——お集まりいただいた4人の若手技術者には、現在の業務内容、仕事のやりがいなどについて伺います。

鈴木 現在土木関係の現場で現場代理人を担当しています。私の父も建設業に従事していて、子供のころからその姿を見てきましたが、自分も現場に入って驚いたのは細かい仕事が多いことです。穴を掘削するにも施工計画書や図面を描くなど想像以上でした。また高校時代のインターンシップで、現場作業は学校での実習とは大違いで、作業

のスピードなどには感心させられました。入社6年で、さまざまな現場の竣工に携わりましたが、「終わった」という瞬間が私のやりがいです。まだ小さい我が子にも、後々「ここはお父さんがつくった所だよ」という話もできたらいいなと思っています。

神長 木造住宅メーカーで設計を担当しています。わが社では間取りだけでなく構造関係も自社設計し、内装・電気配線なども含め、さまざまな専門知識が求められます。また確認申請の業務や書類作成、「省エネ住宅ポイント」などの証明書の発行業務と、毎日パソコンとにらめっこの日々が続きます。現場で思うのは、やはり若手や同僚不足です。自分の父と変わらない年代の方が多く、同年代が少ないように思います。これは若い世代の建築に対する興味が薄れていることが原因の一つだと思います。仕事のやりがいですが、私は次の世代、また次の世代へと、ずっと残るものを造るとても大きな仕事に携わっていると考えています。将来にわたり自慢できるような建物を造るなど、少しでも建築に興味を持ってくれる方が増えればいいなと思います。



インターンシップ風景

